豐竹駒大夫の死

内田三千三

川を隔てた京橋圖書館で木谷蓬吟先生の近著「淨瑠璃研究書」の一章「竹本義大夫傳」を感讀した日。夕刊で文樂の鬼才豐竹駒大夫の死を知つた。

ゴボ〳〵と込み上げる故人への追憶に胸を浸され乍ら月冴えて肌寒い早春の夜街を私は「うつろ」な心で家路についた。

谷底を覗き見る如き深美な駒大夫の藝術は、永劫にこの地上から姿をかき消して了つた。

狹くとも深淵な彼は津大夫の錆、古靱の眞綴と俱に文樂の三絶であつた。若輩な私は故人の逸話、藝歴に就いて何等の知識も持ち合せてゐない。從つてこの走筆は愚かな繰り言に終始するであらうけれど。讀者諸賢よ！もう暫く思ひ出を綴らせて欲しい

○

烈陽がヂリ〳〵照りつける、たしか去年の八月の或る一日であつた、私は久々で東上した大阪文樂を觀聽すべく、新富町から兩國行の市電に乘つた。

茅場町を何時か過ぎて蠣殼町から人形町へ向つて走つてゐる時空席になつた私の隣へ澁い明石を着た老人が腰を下ろした、「車掌はん、はま町二枚おくなはれ」……と錆のある中年の女の聲が先き隣でした。

矢張り私と同じやうに明治座の文樂へ行く人かナ…とふと懐しく思ひ乍ら横をふり向くと。深い冥想に耽つてゐる如く、默々と簿座してゐた隣の老人は紛れもない盲目の駒大夫であつた。

「お師匠はん、もうじき出ますせ…」とその女の人が手を取らん許りいたはつて云つた。私にはその中年の人が、おかみさんか付き添ひの人か分らなかつた。けれども駒大夫は無言でうなづくと、混雜する車内の空氣とはかけ離れて端然と落ち付深い蒼乎たる沈默に沈んで行つた。

クッキリと鼻筋の通つた、彫刻的な横顔に清鋭な皺線が脈打つて引締つた口元には靜深な影が流れてゐた、一舞臺で見る駒大夫は盲人特有の陰影が漂つて仄暗い、いたましさを感じさせたけれど素顔から受ける印象は、悟入の人に見る清冽さと鋭敏な感覺が渾然調和して一生を藝に打ち込んだ、藝術家の面影を鮮知させる清深な氣韻に思はず胸を打たれるものがあつた。

○

錣大夫の死は末路落漠たる痛ましさを濃感させたが、駒大夫の死にはそう云ふ混濁した侘しさがなく、身を以つて、淨瑠璃藝術に生涯を捧げつくした、嚴粛な清亮さと文樂の眞世話物に最後の墓標を打ち込んだ人として限りない哀惜を覺えさせる。その忽然たる死を通じて、清らけき一沫の詩韻さへ窺知させるのは究々として精進した、纖深な藝術の反映であらう。

土佐大夫の世話物は天衣無縫、洗練枯淡の妙境に到達した名藝であつた。駒大夫は清韻深趣、世話物の詩情を測々と堀り下げた尊き殉教者の如き感がする。不遇と云へば不遇であつたけれど、育ぐまれぬ環境にあつても飄然として一貫した氣魄を以つて自己の藝術を纖巧に堀り下げた眞摯さは、梅花清香を放つ清艶凛烈な風情があつて感銘深い。

生前とりわけ得意とした、梅忠の「封印切り」はしみ〳〵迫る人生詩を描出して至

藝であつた。

身も魂も哀傷の世界に埋づめつくして嗚咽する梅川の切愁なぞキメの細かい獨特のキザミ込みで纖美鋭巧に世話物の詩情を名描した。「私が大事の守りを、内の鏡筍に置いて來た」……の深韻なぞ今猶耳底にコビリ付いて消えぬ。

それと「今日は島屋で彼の田舍のうてずに。せびらかされて、つぶりが痛い」…がゾッとさせる程哀艶だつた。心に染まぬ田舍客の身受ばなしに慄然として一層死んで退けやうかと迄忠兵衛を思ひつめる。しがない見世女郎梅川の翳影深い切愁が流露して、この愛慾的な心理波紋は犇々と胸を衝いた。

到底それは不可能事と思つても、駒なき文樂の眞世話物に名人土佐の再出馬を夢想したのも束の間、忽然として土佐大夫も永眠した。

文樂の世話物は秋風慘として聲なき寂狀になつて了つた。

暗澹と胸を覆ふ、死の旋風裾に、文樂世物の前途を想ふ時、永遠にポッカリあいた大穴を、如何に埋めて行くか、絶望の吐息と返らぬ人への追慕が憂痛に迫る。

拙くとも文樂の中堅が發奮し、土佐、駒大夫の骸を越えて血みどろに前進するより匡救への道はない。

一段でもより良き淨瑠璃を舞臺に再現することが今は亡き兩巨星への唯一の花むけであらう。（四月三日蕪筆）

豐澤團都糸連祝賀會

神聲會第二十三回競演會に於て團體優勝旗を得たれば祝意を表する爲四月廿六日より三日間神聲會の後援の下に中道軍人會館に淨瑠璃會を開き盛會なりしと云ふ。本社は記者東上中とて缺席せしが茲に祝意を表す。

岡山の寸翰

四月廿五日沖田神社お日待奉納淨瑠璃は市川團治の面文樂入にて滿員の盛況なりき

太十前　益田いつゝ　太十奥　庄谷婦多見
鳴門奥　山口　福壽　鮓屋　松田　紅葉
帶屋　玉井　玉司　菅四　岡部　長久
酒屋　森野　老人　糸玉司、加代

五月六七兩日梶並村神宮寺にて慰問淨瑠璃を開いた、山間僻地二里三里の山を越へねばならぬ但馬の境なれど大入素義普及の効果滿點（糸吉加、月子）

六日　七日　演者
御殿　柳　玉之助
鮓屋　日吉　美雀
阿漕　忠三　常盤
合邦　妙心寺　長久
紙治　太十　住之助
菅四　宿屋　都

葬送の禮狀を懷いて泣哭す

鰹、駒、土佐、永樂、巖、津、金杉寅太郎、三木魚勢、女義東と三四五の三月にかけて隨分死んだものである、差支なき者は殘り惜まれる人は逝く。女義久國の死を耳にす。嗚呼

角、叶の文樂入り可祝。陸路改め七五三大夫の奮起發に一縷の望みを囑す